



俳諧・和歌・古典の師 北村季吟

野洲町立歴史民俗資料館
館長 古川 与志継

はじめに

北村季吟は、江戸時代の初め寛永元年（1624）12月11日に、北村宗円の長男として生まれ、宝永2年（1705）6月15日江戸で亡くなっています。82歳という当時にあっては長生きで、一般には俳聖松尾芭蕉の先生に当たるとともに、数多くの古典の注釈書を書いた人として知られています。最も驚かされることは、版本で刷って世の中に出版されたものだけに限っても11種類、180余冊もの注釈書を著述していることです。日本の古典の学習にあたっては、きわめて重要な人といえます。その季吟は、近江を故郷とする人であったので、ここに一端を紹介し再発見できればと思います。

医者の中として生まれ育つ

まず、季吟の姓北村は、近江国野洲郡北村（現在の野洲町大字北）に由来します。その北村に暮らした季吟の祖父北村宗龍は医者であり、連歌をたしなむ文化人でした。宗龍は、連歌を里村紹巴に学び、かつて飯尾宗祇も足をとめたことのある永原天神（野洲町永原の菅原神社）の連歌の宗匠をしていました。

宗龍の長男宗与は家業の医者と連歌宗匠とを継ぎ、郷里北村で暮らしました。二男宗円が季吟の父で、京都に出て医学を学ぶかたわら、連歌も学んでいます。

季吟は、通称久助といい、慮庵・七松子・拾穂軒などの号を用いますが、祖父や父がそうであったように、早くから家業の医学を学んだと考えられます。25～26歳の頃、山城

長岡藩に藩医として勤務したことでも知られています。当時の医学教育は、儒学はもちろん古典の講読なども必修の科目であって、後の古典の学習も、決して医学の正統から逸脱したことではなかったといえます。

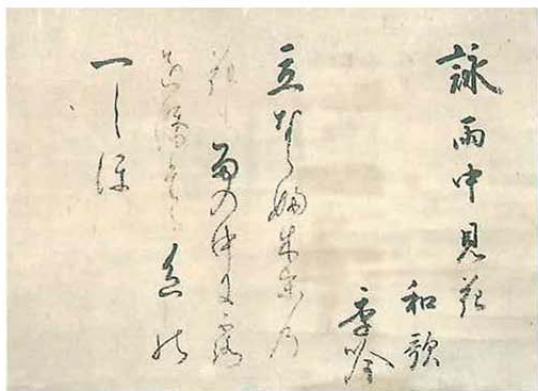
歌学・古典・俳諧を本格的に学ぶ

寛永16年（1639）16歳で安原貞室に入門し、俳諧を本格的に学ぶようになります。6年あまり指導を受けた後、貞室のすすめで正保2年（1645）22歳で松永貞徳の門下に入りました。貞徳は75歳、当時の文壇中の重鎮であり、和歌・古典・俳諧などの広い才能をもち多くの門弟を養成していました。季吟は、この大家に直接ついて一生懸命に勉強しました。

そして、季吟の努力は先生の認めるところとなり、若年ながらも貞門（貞徳に学ぶ人々の仲間）における地位は高まり、慶安元年（1648）25歳で季題の解説書『山之井』を刊行しています。『伊勢物語』を暗唱しようと努力し、毎日発句日記（発句は俳句のこと）



北村季吟画像（季吟文庫蔵）



北村季吟和歌懐紙（季吟文庫蔵）

をつけ出す努力をしています。そして、承応2年（1653）30歳の春に行われた貞徳晩年の大興行紅梅千句の開催には、先輩に並んで参加し、明暦元年（1655）32歳の時『紅梅千句』の刊行に際しては跋文（あとがき）を記す立場にまで進んでいます。

俳諧宗匠として独立する

承応2年貞徳の没後、門入たちは各自師の偉業を継承発展させるべく努力しました。季吟は、上記『紅梅千句』に147句と跋文を記述し、明暦2年8月の貞室の『玉海集』にも658人の作者中で、貞徳・貞室に次いで第3位の句数を数えるようになっています。

明暦2年33歳の時は、季吟の俳諧生活の上で大きな意味を持つといわれています。前年の暮れに書かれた俳諧秘伝書『埋木』が存在し、明暦2年3月に行われた季吟系俳人のみでなされた祇園社頭での俳諧合（季吟に句の勝ち負けを決めてもらう俳句大会）を行い、7月に『誹諧合』6巻として刊行しています。季吟はこの判定に当たり、『日本書紀』『古今和歌集』『源氏物語』等、更には中国の古典をも引用し、あるいは先師貞徳の言、先行書等を引き合わせて、句の上手下手を述べて勝敗を決め、博学のほどを示しています。この俳諧合は宗匠開きの意義を持ち、この時季吟が宗匠として独立したと考えられます。

そして、万治3年（1660）37歳における季吟一門の句集『新続犬筑波集』20巻は、作者

46か国、727人、句数4269句におよび、山崎宗鑑の『新撰犬筑波集』、松永貞徳の『新增犬筑波集』に匹敵する句集を作ろうとの意気込みが認められます。

この道に入って20年、貞徳が没して7年、貞室と別れ宗匠として独立して4年の間にこれだけの勢力を持ち得たのは、季吟が単に実作の俳人であつただけでなく、句作の理論に通じ、更に和歌・古典に精通した豊かな知識の持ち主であり、東本願寺やその他の社会的・経済的な地位の高い人々の支持を得ていたことによると考えられます。

古典注釈に努力する

寛文元年（1661）38歳から天和3年（1683）60歳ころまでには、『土左日記抄』に始まる古典注釈書を次々と刊行し、これに多くの時間を割かねばならなかつたと考えられます。その注釈書の執筆完成の状況はつぎのようになります。

『大和物語抄』	6冊	29歳
『土左日記抄』	2冊	38歳
『伊勢物語拾穂抄』	5冊	39歳
『歌仙拾穂抄』	3冊	40歳
『徒然草文段抄』	7冊	44歳
『和漢朗詠集註』	10冊	47歳
『湖月抄』	60冊	50歳
『枕草子春曙抄』	12冊	51歳
『百人一首拾穂抄』	4冊	58歳
『八代集抄』	50冊	59歳
『万葉拾穂抄』	30冊	63歳

『湖月抄』は、紫式部が石山寺に参籠し湖上の月に興味が湧き『源氏物語』を書いたとの伝説から、その注釈書に命名したものです。季吟は自らも、湖国の出身であることもあってか「湖月斎」の号も用いています。

上記のように次々に注釈を進めることができたのは、季吟が博識であったことはもちろん、京都にあって解らないことはその道の人々に尋ね、書籍を求めて調べたことが知られて

います。要領のよい情報収集能力ととりまとめ能力のすばらしさによると考えられます。

そして、この古典の注釈に集中しているときでも、俳諧も決しておろそかにせず、門弟の指導・詠作・興行、あるいは句集・式目書の刊行などを行い、貞門派の維持継承に努めています。そして、子の湖春・正立の成長と共に、次第にその仕事を彼らに任せるようになっていきます。

ところで、明暦元年（1655）32歳で執筆した秘伝書『俳諧埋木』は、延宝元年（1673）50歳の時によく刊行されました。それは、大阪から広がりつつあった談林派（西山宗因を中心に流行）の勢力に対抗しようとしたもので、貞門が歴史的にも純正正統であることを強調する必要があったことと関係すると考えられます。

貞門の俳諧は、一口に言えば言葉の遊戯で、機知と洒落で即興的な笑いを催して楽しむものであり、一般の人々ことに上流階級のなぐさみには格好なものでした。古典にも和歌にも通じていた季吟は珍重され、東本願寺やその一族と関係が深く、13世宣如上人の第三子で長浜の大通寺の開祖となった靈瑞院従高と親しく、万治2年季吟36歳の時従高から古今伝授を受けています。

このような権門への出入りがことに多くなり、年と共に歌学への指向が増し、天和3年（1683）60歳の2月14日新玉津嶋神社に社司として移り住んだのを機会に、長男湖春らにその地位を譲り、自らは俳諧宗匠としての第一線から退いています。

幕府歌学方北村季吟

季吟は、元禄2年（1689）66歳で幕府に召され、12月20日季吟200俵、湖春20人扶持で抱えられ、奥医師列に加わり将軍綱吉の和歌の指導を行う歌学者となりました。ここに初代歌学方が成立します。

元禄4年12月に法眼の位になり、元禄12年

76歳のとき12月18日最高位の法印となり、再昌院の号を受けました。しかし、元禄10年（1697）正月15日には長男湖春が50歳で没し、元禄15年79歳のとき二男正立が47歳で没しています。

季吟は、著書「徒然草拾穂抄」7冊を自から書写し将軍に献上していますが、江戸では毎日登城しいそがしく暮らし、まとまった著書も出されていません。宝永2年（1705）孫湖元に職を譲り、同年6月15日82歳で、季吟はその生涯を閉じました。季吟の墓石には「花もみつ郭公をもまち出づ この世後の世おもふ事なき」との歌が刻まれています。

歌学的知識を強調した季吟

季吟の初期の俳句には、のどかな春の日に、のんびり歩き花見をする様子を詠んだ「一僕とぼく／～ありく花見哉」（『山之井』）があり、『論語』をふまえた句「まさ／～といますが如し魂祭り」（『独琴』）などがあります。

季吟は、歌学的知識を持った者の句が眞の俳諧で、これが修業できていない人の句といかに違っているかを強調しています。

俳諧の源流が連歌であり、さらに和歌であることはいうまでもなく、俳諧興行のために古典知識が必要でした。当時俳諧をたしなむ者は、堂上・権門のような知識人のほかに、多くの裕福な庶民階級の人々がいました。彼らには俳諧が支障なく興行できる知識が必要であり、さらにできうれば古典的教養がなお



湖月抄（野洲町立歴史民俗資料館蔵）

高まればとの思いがあったと考えられます。そのための目安書、これを季吟は目標とし、この人々を対象として多くの古典注釈書を述作・刊行したと考えられます。

季吟は、諸資料をできる限り調査し、出典を明記し、頭注を設けるなどして充実した注釈書を作っています。実に、俳諧・和歌・古典に精通し、その基礎となる古典の普及に果たした役割は高く評価されるべきでしょう。

北村季吟と近江

季吟は、近江（北村）を故郷と思い、故郷の人々と密接な手紙のやり取りをしています。寛文2年（1662）正月18日永原天神（菅原神社）の社頭の梅を「かみがきやこゝも北野の名にしおハ、さかふるうめのかげもかはらじ」との和歌に詠んでいます。湖春が季吟の命により編さんした『続山井』には、永原で詠んだ「祇王井にとけてや民もやすこほり」の句が収録されています。

季吟は天和2年（1682）4月、58歳の時、近江八幡に豪商伴庄右衛門の招きにより滞在しています。この時、八幡山に登り山頂から見える十景の和歌を詠んでいます。その中に三上山を眺めて「あふみぢはむら山あれど其



北村季吟句碑（野洲町北）

名さへ みかみのたけのしもにたつらし」と詠んでいます。また、伴可計・只計をはじめとする八幡の連衆12人と連歌を興行しています。八幡の連衆に見られるように、湖南地域を中心に各地に季吟の門人がおり、その人々との関係を大切にしていたことを残された手紙から知ることができます。

季吟は、北村の人々との音信を大切にしていました。元禄2年（1689）12月6日付、従兄弟の北村源太輔（宗雪）に宛てた書状では、幕府に召され江戸へ下る喜びを書き送っています。北村の西遊寺の住職了意への手紙なども残っています。江戸へ行ってからも、亡くなるまで故郷と密接な関係を保っていました。季吟の祖父宗龍の50回忌に当たっては、江戸で歌を詠み、歌を書いた短冊にお金を添え故郷へ送っています。「今もなをあいみてましを人もまた 世をもてかぞふいのちなりせバ」の歌の短冊の裏には、従兄弟宗雪から送られた宗龍の硯を手元にはなさずにいることが記されています。また、湖春はその名からして近江の湖に因むと考えられますが、この時「かみ山ちかくみるだになぐさます」とをきむかしの影しとめねば」と詠んで、近江を懐かしがっています。

湖春は早世してしまいましたが、湖春の子は湖元（2代目歌学方）、中興の祖といわれる5代目季文の子は湖南と名付けられました。季吟家の人々は、近江を懐かしみ、ささやかな音信が行われてきました。

野洲町では昭和30年に北村季吟顕彰会が設立され以後顕彰につとめ、現在、命日の6月15日に野洲町北の句碑の前で法要と俳句会を開催しています。また、小中学生の文学賞『季吟賞』の表彰も行われています。

滋賀文化財教室シリーズ No.192号

発行年月日 2001年2月1日

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525